

東方白狐録√B 【準備 中】

白狐さぐじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは一匹の変わった妖狐の物語

生きることしかできない呪いにかかった少女の物語

昔々のそのまた昔、人々の記憶から消えた時代の昔。月の光が照らす夜、狐は一人目が覚めた。

独りで生きる事を辛いと思いつつも進み、名を貰い、神へとなった。

それでも狐は独りを嫌い、仲間を見つけることにした。

そんな狐の少女の死なない記録である。



この作品は一時的に投稿を休止中です。再開をお待ちください。

諸々の詳細は、そのうち活動報告に書きます。

残して欲しいというコメントがありましたので「√A」と付いている方は残す事になりました。

なろうにも投稿中（簡易リメイク版）

目次

第一章 神話時代

- | | | |
|-----|------------|-------------|
| 第一話 | 「赤い目の白い子狐」 | 1 |
| 第二話 | 「白い狐の生活風景」 | 6 |
| 第三話 | 「神としての名」 | 10 |
| 17 | 第四話 | 「過ぎ行く時間と風景」 |
| 23 | 第五話 | 「神と神の酒呑み対談」 |

第一章 神話時代

第一話 「赤い目の白い子狐」

とある場所、一匹の狐が雲から顔を出した月の光で目を覚ました。

「……………うう」

?

「……………んん？」

??

「……………えう？…あれ？…此処は……………何処？」

…地面は土？…壁は…岩？

洞窟なのかな？

「そういえば私は……………ダレだっけ？」

え、そんな…。なんで、なんで思い出せないの。

どうして、私は…私は…。私は確かニンゲンだった気がする。

ニンゲンって何だっけ？思い出せない…いや、記憶がないような。

ふと自分の手を見てみると獣の足だった。獣の足は『真つ白』で、とても綺麗な毛色

だった。

そこから「自分の姿が分かるモノがあれば自分が何者か分かるかもしれない」と考えていると、近くの方から水の流れる音が耳に届いた。

まずはその場所に行ってみることにしよう。

水の流れる音の根源は池だった。

池を覗いてみたら、自分の姿が池に映っていた。

私は「目が赤い、真っ白い子狐」だった。何故か驚きはしなかった。

まるで、そのことが当然の事のように感じた。

そんな事より、「目が赤い、真っ白い小狐」が、たぶんアルビノではないかという考えが頭に浮かんだ。確か、アルビノは日の光に弱かったはず。自分が此処に一人で居ると言うことは、捨てられたのだろう。

何故こんな知識があるのか分からなかった。分かる手段が無かった。分からないモノを永遠と考えていても埒が明かないので、考えることを辞めた。

今やらないといけない事は生きることだ。生きるには食べていけないといけない。

自分は光に弱いから、昼間の行動は控えないといけない。

今、周りを見た限り木の実をいくつか確認できた。ご飯はそれで問題無いと思う。記

憶は無いけど知識はあるみたいで、どれが食べれてどれに毒があるのか分かる。

これなら生きてはいけると思う。

「んん…ふああー、眠い」

私が初めに目覚めた洞窟で寝ることにした。此処は雨も風も入って来なさそうなので、これからは此処で寝ようと思う。

そんな夜を私は深い眠りについた。

◇

あの時からたぶん1000年は経ったと思う。私の歳が分からないし、ちゃんと数えてないから正確には違うかもしれない。

確か60年経った辺りから「自分は普通の狐じゃない！いくら何でも普通の狐はこんなに長く生きない」と思った。

それから40年経って、100歳になると自分の中に不思議な力が宿った。それが妖力だと後で分かった。

200歳になるころには尻尾が1つ増えて、2本になった。

そうなる私には完全妖怪だと確信した。

でもそれは、もう昔のことだ。

今では尾は9本、いわゆる「九尾」である。妖力の使い方は大体分かってきた。人型に化け、しかも尻尾を隠すことも出来るようになった。

が、1つ不満なのが人型になると幼い姿になってしまう。身長と体型から幼女である。

初めに浮かんだ姿がそれだったから仕方ないけど、すらつとした姿になりたかった。

それから変わったことは色々とある。

あの洞窟があった近くに小さな村があった。その村に実は良く通っている。

村の人達には妖怪だとバレているけど、私が人を襲わないと分かっているので話たりしている。

最近、「ミクラ」という名前を頂いた。結構この名前は気に入ってる。

村では、私じゃないと取りに行けない薬草を取ってきて、自分の食べれる物と交換している。後は、村を襲うとしている他の妖怪を追っ払ったり、倒したりしている。薬草を取りに行けない冬は、殆どが妖怪退治だ。

あ、昔のことを振り返っていたらもう夜になってる。

今の季節は冬でもとても寒い。毛皮があっても寒い。

ふかふかの枯草のベットでぬくぬくと温まって今日も寝る。
明日は、あの家のおばちゃんと話そうかな。

第二話 「白い狐の生活風景」

いつもの洞窟、いつもの朝。

少し眠いけど起きなといけない。

「ふああー、んん。よく寝れた…のかな？」

と呟いてみたりする。けれども、その返答を返してくれるヒトは居ない。なんとも寂しいものだ。居たら居たで怖いけど…。

私はこの洞窟で暮らしている一匹の狐だ。狐と言っても妖怪の狐だけだ。

さてと、今日もあの村に行こうかな。

支度しようとしても何も無いし、とりあえず人型になった。人型の私は、真っ白でちよつと長めな髪をしている。

長いから切ろうとしたら、切っても切っても元の長さに戻るので、そのままにしている。

村に向かう道は殆どが獣道。それも仕方ない事だと思う。自分も獣だから。



けれども、そんなに簡単に村に着いたりはしない。

私とは違う厄介な妖怪たちに出会ってしまった。彼らはそれなりの知能はあるのか、これは待ち伏せに近いかもしれない。

彼らはオオカミに近い姿をしていて、殆ど群れで行動しているのを見る。まあ、妖力が少ないから数で押し切る形になるのは仕方がないと思う。

いつもなら飛んで逃げるのだけど、今日は清々しい朝を邪魔されたから、殺してしまおうかな。

片手に妖力の塊を出して、丁度良い大きさを数個造り出す。

それを火の形にして、群れにぶつけた。数匹が物凄い勢いで燃え始めた。これは所謂、狐火なのだと思う。

それでも、まだ扱いが不慣れだから2、3匹に逃げられてしまった。燃やした数匹は火を消した後、地面に埋めといた。

途中いろいろあったけど、やっと村にたどり着いた。

村の人達は稲を刈っているらしく、忙しくて構ってもらえなかった。でも私が手伝いをする隙間もないので、米を狙う鼠を捕まえている事にした。

今年は豊作で出来が昨年より良いらしい。そのせいか、鼠が多く直ぐに蔵に穴が空いてしまつて困つていると聞いた。

村の人からは、そのことから色々とお礼を言われるが、私にとつては食料が手軽に手に入るチャンスなのでお礼を言われる事をしたとは思つていない。

最近、村のいろんな人から「此処に住まないか」と言われる。それはとても嬉しい事なのだが、私の家はあの洞窟だと決めていたので、やっぱりとそれとなく断つている。それに、今から家を建てるとなると、冬を通り越して春になつてしまう。なので村の暮らしを優先してほしいと思つてる。



秋が終わり、冬の足音の真つただ中。

私は村で刈り取つた稲の藁を取りに来ていた。私が住んでいる洞窟は、冬になると風や雪が入らなくてもとても寒くなつてしまう。そのため、藁が無いと冬を越す事は難しい。

藁を貰う代わりに、冬の間だけ夜の時間帯の見回りをしている。人間は冬になると活動が鈍くなるので、妖怪が襲いに来る確率が上がるのだ。

まあ、それは此処に来る理由の一つで、洞窟で一人ぼつちは寂しいので、村の人達と話したいのがもう一つの理由だ。

◇

自分でも分かる小さい体で藁を洞窟まで持つてきたが、そんなに重くは感じなかった。

私は今までコレといった力仕事と呼べる仕事をしたことがなかった。妖怪の体は人間とは違うから、もしかしたら岩を軽々と持ち上げることも可能かもしれない。

そんな事を考えていたら、直ぐに敷き終わった。余った藁は、濡れないように洞窟の奥の方に置いた。

そこから少し抜き取り、石を丸く囲んだだけの囲炉裏？に薪を置いて、火を出した藁に灯して薪に落とすといった。

少し待つと薪にも火が付き、少しづつだが洞窟内も暖かくなるだろう。

その温かさを元に、この寒い夜は越せるかな？

明日もあるし、そろそろ寝なきやな。

第三話 「神としての名」 ■

外は暗く、雪がしんしんと降りしきる夜の村。雪の上には小さい一組の足跡。

村は静か。人間は寝ている時間帯。出来れば妖怪たちも静かにしてもらえたら嬉しいのだが、私も妖怪だから言えたことじゃないけど…。

今は約束通り見回り中だ。

「はあー、寒い……………」

やっぱり人型は、毛皮が無いからとても寒い。でも、元に戻ると視界が低くて見回りがまともに出来なくなる。

ふと、月を見てみると、雪とマッチして綺麗だった。こんな月を見ながら何か飲みたいたいと思っても、今ここにあるのは狼型の妖怪の死体だけ。

食おうとすれば食えるのだけど、あまり食いたくない。あまりこの死体たちを村の人達に見せたくないの、燃やす事になっている。ついでに温まる事が出来るので助かる。

ちよつと前に偶々見つけた木の実を口の中にほおりこんで腹の足しにした。

手が炎に触れない程度に近づけて暖まっていると、いつの間にか雪が止んでいた。雪が止んだおかげか、周りが見やすくなった。

周りを眺めていると、遠くの方に人影が見えた。人？は此方に気付いたようで、近づいてきた。

その人？は男性で、私の身なりを見ながらこう尋ねてきた。

「お主妖怪だな。妖怪がこんな村で何をしておる！」

突然怒った口調で言ってきてビックリした。

「何って、守ってるだけ」

「ふむ、お主のような妖怪も居るといふ事か…。興味深い」

何の事だろうか？

それに…。

「私は『お主』じゃないです」

「おお、そうだな。名を聞いていなかっただなのう。まず初めに儂からじゃな。儂の名はスサノオという。最近、此処『根之堅洲國』ねのかたすくにに住み始めた者じゃよ」

此処は根之堅洲國ねのかたすくにというのか。

「私はミクラ。少し変わった九尾の狐」

「大層変わっておるぞ。その『赤い目、真つ白な毛並み』、それに妖力の以外に神力も感

じるのう」

？

「ジ、ジンリヨク？」

「なんだ、神力を知らぬのか」

「たぶん…」

「そうか、…ふむ。神力とは人々から信頼され、信仰から生まれる力のこと。例えば、感謝から神力が生まれることがあるのう」

そんな簡単なことで。

「感謝なら普段からされているけど」

「たぶんそれが元じやろうな」

そうスサノオが答えた。その答えに何となく納得していて気付いた。月が沈んで、日が昇りかけていることに。

あと、日が出たせいでより一層寒くなった。

「ん？寒くなってきたな。ミクラよ、何処か寒さをしのげる場所を知らぬか？」

それなら…

「知ってる、というかコツチに」

と、私はスサノオを私の家あの洞窟に案内した。

◇

外に比べて暖かい洞窟。薪をくべて火加減を調節する。

そろそろ体も温まってきただろか?と思つたらスサノオが話しかけてきた。

「此処は良き洞窟じやな。ミクラは此処に住んでおるのか?」

やっぱり、分かっちゃうよね。

「うん、住んでるよ。というか、此処は私が育つた場所だから」

「育つた?親はどうした」

親……。

「……知りません」

「知らないとは?……まさか!」

そう、そのまさか。

「そのまさかかもしれない。気づいた時には私は一人でした。この様態のせいで棄てられたやもしれません」

昔から考えていたこと。私が目覚めたときに、周りに他の狐は居なかつた。食べ物を探しに森の奥に何回か入つたが、狐だけ見ることは無かつた。

それはそれはとても寂しい事だつた。悲しい事だつた。

「深く聞きすぎたな、すまぬミクラよ」

「いいえ、あまり気にしてはいません」

「そうか。ところで、そのミクラという名は何処で手に入れたんじゃ？」

「さつき私が居た村で貰った」

「そうか。先程から質問ばかりで悪いが、あと二つばかり質問してもよいか？」

「二つ？」

「ん、良いよ？」

「一つ目だが、ミクラは今、神力を持っている。という事はミクラは『神』という事になる。そこでだ、ミクラの『神としての名』を儂が決めても良いか？」

私って神だったんだ、知らなかった。

「『神としての名』？まあ、いいですよ」

「分かった。二つ目の質問としよう。二つ目だが、お主の能力についてだ。何か分かるか？」

「能力？」

「分からぬのか？そうだな…、能力について自分の心の奥底に聞いてみる。たぶんそれで分かるじやろう」

心の奥底 心の奥底

能力は……………』

「神としての能力は『自然を司る能力』、妖怪としての能力は：『ありとあらゆる理ことわりを操る程度の能力』かな」

「神の方は：そうか。ミクラはもしかすると、いや、お主は不老不死だと思うぞ。妖怪の方は、うーむ難しいのう。その能力は上手く使えるようになるまで、あまり派手に使わん方が良いだろうな」

「そうですか」

「あんまり驚かんのう」

「不老不死は、前々から心当たりはあったので」

何となくだけで。

「うむ。そうだ、お主の『神としての名』を考えなければな。能力があればだからぶつぶつ・・・」

急にぶつぶつ言いながら、スサノオは考え始めた。

どんな名前になるか少し楽しみ。

そんな事を思っていると、結構早くに考えが纏まったようだ。

「おお、すまなかつたな。『神としての名』だったから、結構悩んでしまったわい。それで、ミクラの神としての名は『ウカノミタマノカミ』じゃ！」

字はこうじゃと言い、地面に『宇迦ウカノ之御魂神ミタマノカミ』と書いてくれた。

私は今、とても嬉しいらしい。頬が緩んでいるのが自分でも分かかってしまう。

「ミクラの今の顔は良い顔じゃ。そんなに嬉しかったのか」

何度も頷いた。

ふと、洞窟の外を見るとまた雪が降ってきたみたいだった。

◇

「今日は此処に泊まっていきませんか？こんな場所ですが…」

「うむ、そうしようかのう」

私は洞窟内を温めなおす為に火に薪をくべなおした。

第四話 「過ぎ行く時間と風景」

スサノオは我が家に一晚泊まった。

昨日の夜は、私と村との関係や今までどんな風に暮らしてきたかを話した。スサノオは、此処まで来た経緯を話してくれた。

スサノオは空の雲より上の方から来たと言っていた。

◇

目が覚めた。

欠伸を一つして、起き上がった。立ち上がって、寝床を簡単に整えておく。

とくに寝間着とかは無いので、そのまま洞窟を出て近くの川に顔を洗いに向かった。

眠い目を擦りながら、川に向かってしていると後ろから声を掛けられた。

「体験したことのない事が出来て良かったぞ」

体験？

何のことだろうか。

「？」

「ああ、気にしないでくれ。コッチの勝手な感想を言ったただけだ」
気にしなくていいならいいや。

「…うん」

私がそれとなく返事をしててもその返答は返ってこなかった。

いつの間にかスサノオは、川の中に足を突っ込んで立っていた。

と、突然素早く動くと、右手に魚を鷲掴みにしていた。

「さてと、朝飯が出来たぞ！」

どうやら、頼んでないのに朝飯を捕まえてくれたらしい。

◇

洞窟に帰ってきて火を出して、魚を適当な棒に刺して焼いていた。

火は狐火で出したが、スサノオはそのことにさえ驚いていた。

魚は美味しかった。

◇

その日は、スサノオと村を回った。

村の人達はスサノオに怯えていたけど、私が説明して私と一緒に行動することを伝え

ると、安心したのか話しかけてくるようになった。

スサノオは私が神に成った事を説明していた。

村の人達は何故か納得した顔をして聞いていた。

その後の事は知らないけど、村の人達とスサノオは話し合っていたみたいで、私の神社を建てる準備を勝手にしていた。

次の日、また村に来たら何かを建築中で近くに居た人に聞いたら、私の神社なのだと言ったのだ。

その事をスサノオに聞いたら、「ん？ああ、お前に話すのを忘れておったな」と謝りもせず答えたので。

◆ まあ、怒る事でも無いのでそのまま私の神社は建てられた。

◆ 私の神社は『御倉神社』みくらじんじやという名になった。

これは私の名前が元になっている。

神社を建てたおかげか、神力が前より増していた。

その増えた神力の使い方・使い道をスサノオに教えてもらった。

能力の使い方は「自分で調べろ」と言われてしまった。まあ、それは私が持つてる能

力だから、スサノオには分からない事なのだろう。

村に妖怪から守る為の結界を張った。

これで村の人達も安心できるだろう。



私の能力についてよく考えていた。

片方の能力『ありとあらゆる理を操る程度の能力』については、なんとなくだけ分かってきた。

もう一つの『自然を司る能力』は、その名の通り自然を操る事が出来た。

植物の生長を早めたり、雨を降らす事も雷を落とす事も、逆に日を照らし続けることも出来る。

また、人類が『自然は永遠にあるモノ』という信念を無意識に抱いているため、私は死ぬことはない。だから私が死なない限り自然は滅びない、逆も然り。

死なないという事は嬉しいが、周りの人達が去って行ってしまうのは悲しい。



あれから3000年くらい経った。正しくは違うと思うけど……
そこから考えると私の歳は4000を超えた事になる。

歳をとるにつれて、私は神通力じんりきつうなるものを使えるようになった。
気付いたのはつい1000年前で、いつの間に使っていた。

でも最近はそのいった力を使うことが少なくなってきた。

理由は村の人達が年々減ってきているからだ。

減っている原因は、少し遠いが巨大な都市ができたから。

そこは暮らしやすく、妖怪すら恐れる頑丈な壁で守られている。

私の村よりは安心できるのだろう。それもそれで何か悲しくなるが、しかたないのか
もしれない。

最近、妖怪たちが活発に活動している。

そのことで怯える人間が多いのだ。

此処の村の人達が全員移ったら、私も此処の土地を離れようかと考えている。

行く場所は勿論、その都市だ。その都市にはスサノオが住んでいるらしい。



この村にはもう人間は居ない。皆、此処を離れてしまった。

残っているモノと言えば誰も居ない住居や使われなくなった畑、それに私の社。

何だか胸の奥がキュツとして、涙が出てきた。

長年住んでいた土地を離れるのは寂しい。

私の神社は、あの都市に新しく建てられている。

村の人達が造ってくれたのだ。此処から離れたくないけど、行かないといけない。

「……そろそろ、出ないと日が暮れてしまう。明日はあの都市の偉い方々に会わないといけないし、それに皆が待つてゐるからね。ふふふ、私を育ててくれた此処の土地よ『ありがとう』」

第五話 「神と神の酒呑み対談」

この都市の中で最も大きい建物は奥の方にそびえ立っている。

遠くから見ても分かる程の大きさだ。

建物の中からは、とても大きな気配が三つほど。

私はその建物の中に入り、最上階に向かった。

◇

最上階の一番大きな部屋。その部屋には、やはり大きな気配が三人。

扉を開けるとそこには、知らない男女が一人ずつ。

と、スサノオが居た。

最初に私に気付いた者が近づいてきて、喋り始めた。

「ようこそ、ウカノミタマノカミ宇迦之御魂神様。私はこの都市の代表を務めているつくよみ月読見と申します。どうぞよろしく」

月読見というらしい。女性に見間違えそうな声質だけど、服装から男なのかな？いや、この感じは男だ。

普通に自己紹介でいいのかな。

「…様とか、敬称付けなくていいよ。私はミクラ。赤目の白狐で、今は穀物の神をやつてゐる。……よろしく」

「次は儂……と言つても、儂の事は知っておるから、その次は「私ね」…そうじゃな」
次はスサノオだったけど、自己紹介は省かれた。聞きたかつたなく。

「私は八意 ××、知識は豊富よ」

八意の後は音が複雑けど、発音はそれほど大変じゃない。

服装は医者、知識は豊富で、胸も…（ ^ ω ^ ）

「改めてミクラ、ようこそ我らの都市へ」

と冗談はさておき。

あとで暇なときに、この都市を散策してみたいな。この後は雰囲気から難しそうだけど。

凄、お酒のに匂いが…。

◇

あの後、スサノオと月読見がコソソリ持ってきたお酒で宴？が始まってしまった。

私はいいけど、スサノオが…。

「ぬわ、飲んだ呑んだ。酔っ払いじゃわい！がははははあ！」

うう、酒臭い。

「ふふふ、まだ飲むのかしら？」

隣に置いてある酒瓶をチャップンと揺らして見せる。

「まだ瓶が余ってるから……」

「貴女、見た目に反して結構豪酒なのね。月読見やスサノオと同じくらいかしら」

「スサノオ達と一緒にしないで欲しいかな。私はあんなに騒いだりしないし」

「それにしても、あんまり酔ってるように見えないわね。さてと、話を変えましょうか」

××が横に座った。

「……何を聞きたい」

「そうね……、貴女の正体かしら」

「正体？ 私は私だよ」

「ふふふ、正体は正体よ。それにしても貴女って生きてるの？ 死んでるの？」

「死んでたら私は此処に居ないんだけど……？」

「でも死んでる雰囲気を感じるのよ？」

「死んでるのに生きてる雰囲気があるのは、私が不老不死だからじゃないかな」

「っ！ 不老不死!? それは、どうやって……」

「能力が原因……」

「能力？」

「あれ、言つてなかったっけ？ 私は神としての能力は『自然を司る能力』」

「その言い方だと、他にも能力があるように聞こえるのだけど？」

「…うん、あるけどちよつと言えないかな」

「そう、私には手が届きそうにない能力ね」

「^X^X^Xは少しダメ息をついた気がした。

「^X^X^Xの能力は？ 私の能力教えたでしょ」

「ふふふ、強制的ね。『ありとあらゆる薬を作る程度の能力』よ。と言つても、今は研究が多いわね。…つて、まだ呑んでるの!？」

え…飲んじゃダメなの(・ω・)

「うん。あ、でも空瓶になっちゃった。取りに行かなきゃ」

私は立ち上がつて、空瓶を両手に抱え込みスサノオ達が居る部屋に向かった。^X^Xも一

緒に立ち上がり着いてきた。

部屋の中は、いろいろ酷かった。月読命はベロンベロンに酔つて床にデロ〜ンと倒れ

てた。

スサノオはと言うと。

「む？ ミクラか。ほれ、こつちに来い。ここに」

胡坐をかいていたスサノオは、膝に座るよう手招きをしてきた。何を企んでるのか分

からないけど、従ってみる。

「ほれほれ、やはり可愛いのー」

「.....」

頭を凄く撫でられた。でも、ゴシゴシ撫でないでほしいな。

「ほれほれほれ」

「.....!？」

なっ！き、触られた……うう。触られた……胸を……。グウウウ!!!

「ほれほべバがガグアア……」

スサノオの膝に座った状態で、拳を顎に思いつきりぶつけた。力任せに怒りをそのままぶつけた。

スサノオは鼻血を少し出しつつ、後ろに倒れた。死んでないか顔を覗いて見たら、ピクピク動いてたから、多分生きてるのだと思う。

「酒に酔ってるのが悪いんだよ。ね、××」

「え、あ、そ、そそうね。」

動揺してる？なんでだろ？

ハハハなんでだろうなー

まあ、いっぱい飲めたし、何も気にせずに帰る。